

こがねはら子ども食堂 よっけ塾

1. 団体概要

- ・居酒屋「よっけ」にて運営されている子供食堂
- ・開催場所；千葉県松戸市小金原地区の居酒屋よっけと隣のフリースペース
- ・開催日時；毎週土曜日の 10 時～15 時（学習支援の実施時間を含む）
- ・参加費；子供 無料、大人 500 円
- ・参加者数；4 人～15 人
- ・自主的に勉強する子供たちをボランティアが見守り分からないことがあったら教える学習支援、一緒に食べるお昼ご飯、自由な遊び場がセットになった子供食堂です。
- ・学習支援を行っていることもあり、小学校 3 年生以上の参加が多いが、親子連れで保育園児や乳幼児が来ることもあります。

2. 取組のきっかけ

- ・よっけは、地域の方々が集う居酒屋で、町内会役員や民生委員等もお酒を飲みに来ており、飲みながら気軽に語りあい、その中で自然に街づくりの企画が立ち上がったりする場所でした。
- ・現在代表を務めている高橋氏は、平成 27 年の春頃、「給食を食べるために学校に来ている子供」や「暗くなるまで公園にいて、街灯の下で宿題をしている子供」がいるという話を知った。その頃、マスコミで「子供食堂」が取り上げられていたことにヒントを得て、「育ち盛りの子供たちにきちんとした食事を食べさせたい」「勉強も教えて上げたい」という思いを抱いた。その思いを同じくする、休日ボランティアの中学生への学習支援の経験がある教員や、塾勤務経験者の居酒屋よっけの店主（以下、よっけ店主という。）等地域の方々と、居酒屋よっけのお客さんの民生委員や町内会長にも声をかけて学習支援と食事の提供等を組み合わせた「こがねはら子ども食堂 よっけ塾」を立ち上げました。
- ・平成 28 年の 2 月に市民センターで昼食を提供する「おためし食堂」を開催、4 月にも市民センターにて同様のイベントを開いた。食事の後に、子供食堂運営に関心のある大人を対象にボランティア説明会を開催し、子供食堂は毎週開催するということを伝えて「調理ができる人」「子供に勉強を教えられる人」「子供と一緒に時間を過ごせる人」を募り、よっけ塾を開始しました。

3. 食育の取組

①若い世代を中心とした食育の推進

- ・子供だけでなく、大人も含めて安心できる場所づくりも意識しています。1 年前に引越してきて、周囲に知り合いがいない母親が、ボランティアが子供の世話をしている間にゆっくりご飯を食べられ、悩み事を気軽に相談できる場として、よっけ塾を活用しているケースもあります。

②多様な暮らしに対応した食育の推進

- ・「頑張っって何かに継続して取り組む力」や「人とコミュニケーションを取る力」が十分に育っていないと感

じられる子供たちは、地域全体が関わって、そうした力を身につけられるように支援する必要があると考えています。

- ・よっけ塾では、日々の宿題や勉強を見守ること、子供の頑張りに対して「一緒に喜ぶ」ことを通じて大人たちが子供に寄り添うことで、子供が「自分は受け入れられている」という安心感や「最後までやり遂げる力」を身に付けていくことを目指しています。一緒に食事をする楽しみはこうした場に子供たちを惹きつける力になっています。

③健康寿命の延伸につながる食育の推進

- ・よっけ塾で食事を提供する際に重視しているのは、「栄養バランス（主食・主菜・副菜のバランス）」、「季節感のある食材を使用する」、「彩り豊かな食事とする」、「手作りの食事を提供する」の4点です。
- ・子供たちがのびのびと安心して過ごせる居場所でありたいと思っているので、他人へよほどの迷惑となること以外については基本的にしつけや注意をせず、見守る姿勢を基本としています。食事を提供する際も、「これを食べなさい」といった働きかけは積極的には行いません。
- ・しかし、栄養バランスの良い彩り豊かな食事を皆で食べ、楽しい時間を過ごし、体験することで、子供たちは自然に食を選ぶ力を身につけていきます。周囲の子供が食べている様子を見ることで、それまで食べられなかった野菜を食べられるようになった子供も出てきました。

③食文化の継承に向けた食育の推進

- ・よっけ塾では食事を提供する際に、「季節感のある食材を使用する」、「彩り豊かな食事とする」、「手作りの食事を提供する」ことを重視していることから、季節感のある食事や食事の彩りといった食文化を子供たちは自然に身に付けていきます。

注； 以上のように、こがねはら子ども食堂では、食育基本法に基づく食育推進基本計画に位置づけられた多彩な食育が実施されていますが、運営者の方々からは、「こがねはら子ども食堂としては食育を直接的な趣旨・目的として行っていない活動も含まれるため、その点は誤解の無い様に御願いたい」とのお話がありました。

4. 地域との連携等による課題解決

(1) 来てほしい人や家庭の参加（主要課題①）

- ・よっけ塾の活動内容は SNS を通じて広報しています。よっけ塾に関わっている地域のリーダー的な方々から、口コミをベースに子供食堂の存在についての情報が広まっているようです。

(2) 資金の確保（主要課題②）

- ・地元住民、企業、近所のスーパー等から、運営資金や食材を寄付していただいています。家庭菜園で栽培した野菜や、卵や米を購入して寄付して下さる地域住民もいます。近くのスーパーが、毎週野菜寄付してくれます。

- ・障害者を雇用して千葉県内に 8 か所の農園を運営しているエスプールプラス株式会社からも、野菜を寄付していただいています。⇒詳細は、「日興みらん株式会社とエスプールプラス株式会社の協力による食材提供」
- ・よっけ塾に寄付された食材を市内の子供食堂に分けることもあります。松戸市内の 9 軒の子供食堂で互いに協力する「まつど子ども食堂の会（代表；高橋氏）」を作っています。特にオープンして間もない子供食堂は資金不足で食材の確保にも困っていることが多いので、取組を広げていくために寄付された食材を分かち合う等の協力をしています。
- ・県単位でも協力組織として「千葉県子ども食堂連絡会（代表；高橋氏）」があり、「まつど子ども食堂の会」と同じように、食材や資金の寄付の受付、加盟子供食堂への分配といった取組を行っています。

（3）スタッフの負担、スタッフの確保（主要課題③）

- ・スタッフはすべてボランティアで参加しています。シフトは組まず、「可能な範囲で参加する」スタンスをとっています。毎週参加するスタッフは、よっけ店主や高橋氏を含めて 5 ～ 6 人程度で、当日参加するボランティアの管理は、高橋氏が行っています。
- ・学習支援では、受験が近づくと教える内容が難しくなるため、元中学校教員等、受験指導に慣れたボランティアに参加してもらうようにしています。
- ・ここまで大きな問題なく運営ができている背景には、調理等ができる居酒屋という環境で行っていることと、規模を拡大せず可能な範囲で学習支援・食事の提供を行うという方針を採用していることあると考えています。子供が「安心できる場所を提供する」ことを大きな目標としているため、規模の拡大は現時点では考えていません。

（4）地域との連携

- ・松戸市が、自治会長や民生委員の集まる会合で、子供食堂について話をする機会を積極的に設けてくれたので、子供の関係する市内の団体・関係者における子供食堂の認知が広がり、連携を広げていくことができました。
- ・松戸市では、平成 29 年度に子供の貧困を所管する「子どもの未来応援対策室」が発足し、子供の支援を強化しています。松戸市が、積極的に子供食堂について周知してくれると期待しています。
- ・松戸市内における子供食堂のさきがけとして、寄付された食材の分かち合いや、ボランティアの派遣等により、子供食堂の新規立ち上げをサポートしていきたいと考えています。子供食堂の立ち上げを検討している人のよっけ塾の見学を受け入れています。
- ・平成 28 年 11 月には「つながろう子ども食堂」と題したシンポジウムに登壇し、子供食堂の周知を行いました。このシンポジウムをきっかけとして子供食堂の運営を始めた方もいますので、今後も周知啓発には力を入れていきたいと考えています。

(5) リスク管理（主要課題⑤）

- ・平成 28 年から、まつど子ども食堂の会加盟の子供食堂では、調理に携わるボランティアは全て毎年検便を行うこととし、各子供食堂の運営者が食品衛生講習の研修を受講することになっています。
- ・よっけ店主は、地域の飲食業組合の副会長を務めていたこともあって、松戸市食品衛生協会と調整し、まつど子ども食堂の会として当該組合に加入することが認められました。このため、よっけ塾のような、まつど子ども食堂の会に登録している子供食堂が検便をする際には、組合員価格が適用され、安価で検便を受けることが出来るようになりました。個人で検査した場合 1 人 1 回 1,600 円かかる検便が、1 人 1 回 300 円で受けられるようになっており、各子供食堂の衛生管理負担の軽減につながっています。

(6) 会場の確保（主要課題⑥）

- ・よっけ塾は居酒屋よっけにて開催されており、電気代や光熱費、調味料等は、居酒屋よっけから提供されています。居酒屋であるため、調理器具や食器等が揃っており、飲食店の営業許可も改めてとる必要がなく、子供食堂を開始する環境は整っていました。

5. よっけ塾が必要としている支援

- ・貧困状態にある子供等、気になる子供がいる場合に、周囲の大人がその子供や家族を子供食堂に連れてこられるような環境が望ましいと考えています。そのため、保育所や幼稚園、地域の子育て支援センターとの連携を強化したいと考えています。学校とも連携を進めたいと考えています。

◎ 日興みらん株式会社[※]とエスプールプラス株式会社^{※※}の協力による食材提供

[※]日興みらん株式会社は、平成 27 年に障がい者の能力を発揮できる就労環境を提供し、雇用を促進することを目的として設立された S M B C 日興証券株式会社（以降、本社という。）の特例子会社であり、書類の作成等の軽作業や農園の運営を行っています。社員数は 40 人であり、そのうち 28 人が障がい者です。

^{※※}千葉県内の 8 か所の農園で障がい者を雇用し、野菜を生産している会社。

1. 取組のきっかけ

■ 農園での社員研修と、収穫した野菜の活用

- ・同社の農園では、障がい者 17 名を雇用しています（多くが知的障がい者）。平成 27 年 9 月より、株式会社エスプールプラスが運営している農場を借りて、みらんファームという農場を運営し、野菜を栽培しています。
- ・同社では、みらんファームを「本社社員の研修の場」として位置付けています。本社では、「ノーマライゼーションの実現」を目指し「心のバリアフリー」を推進しており、その施策の一つとして、みらんファームにおける「ノーマライゼーション研修」を行っています。研修は、本社社員を原則週 1 回、4 名程度、みらんファームに派遣し、そこで勤務している障がい者と触れあい、共に農作業を行うという内容です。協働作業を通じて本社社員は個々の多様性を尊重する事の大切さを学び、障がい者の社員は健常者である社員に作業を教え共に農作業をするという経験を通じて非常に喜びを感じています。
- ・銀行法では、従属業務子会社の業務として野菜の販売が認められていないため、栽培した野菜の一部は研修参加者の部署や新任管理職研修等の場で配布する等していました。より効果的に野菜を活用できないかと議論になり、ノーマライゼーション研修の参加者にアンケートを取ったところ、「CSR の一環として野菜を寄付してはどうか」という意見が多く寄せられたため、寄付先を探すことになりました。
- ・子供食堂は全国にネットワークがあるため、幅広い地域への寄付を視野に入れることができる点や、野菜の寄付活動をきっかけとして子供食堂に関心を持った社員が、子供食堂にボランティアとして参加しやすい点から、寄付先を子供食堂に決定しました。

ノーマライゼーション研修の様子



収穫した野菜



■ 子供食堂への支援を始めるまで

・平成 29 年の春頃、本社に子供食堂への野菜の寄付を提案しましたが、「なぜ寄付先が子供食堂なのか」という説明が必要でした。そのため、まず、本社社員を対象に野菜頒布会を開催し、そこで同時に子供食堂を紹介することを提案し、開催が認められました。そして、平成 29 年 11 月にエスプールのスタッフが野菜を寄付している、こがねはら子ども食堂の高橋氏を招いて子供食堂の活動の紹介をしていただきました。これが子供食堂についての社内認知を広げるのに役立ちました。

野菜頒布会の様子



■ 本格的な支援開始にあたっての確認事項

- ・本社法務部門に銀行法上の業務の制限に抵触するといった法的な問題がないかを確認し、1ヶ月1回程度の寄付活動を行うことを決定しました。
- ・さらに、CSR の部署、本社企画部や人事部との調整を続けるとともに、各部門の役員と調整を続け、平成 29 年 10 月上旬頃に、本社社長から活動に対して賛同を得たことで、その後の調整は円滑に進み、毎月の寄付活動が開始されました。

(3) 連携の流れ

■ 連携の仕組

- ・現在同社では、エスプールプラスが運営している農業を借りて栽培した野菜について、こがねはら子ども食堂を含めた千葉県内の子供食堂に寄付しています。40種類程度の野菜を栽培しているため、その中から旬の野菜を毎月ダンボールに2箱程度提供しています。
- ・エスプールプラス株式会社はいくつかの企業が栽培した野菜を取りまとめ、千葉県内の子供食堂に分配しています。
- ・エスプールプラス株式会社で育てている野菜は無農薬で有機肥料を使用しており、味が濃く安全であることが売りです。そのような野菜を子供食堂に寄付することで、子供たちが野菜の美味しさを少しでも感じてもらえればと考えています。野菜は、エスプールプラス側が船橋のファームに運び、船橋のファームから子供食堂に送られています。

(4) 課題・今後の方針

- ・子供食堂への協力はまだ日興みらんとしての活動にとどまっているが、今後は、各地で社員が子供食堂をボランティアや寄付でサポートし、本社全体で取り組んでいるといえるまで協力活動等が拡大すれば良いと考えています。みらんファームの規模拡大には銀行法上の業務の範囲を超える可能性があり限界があるため、寄付先の子供食堂の数や寄付の量を大幅に増加することは難しいのが現実です。
- ・イベントや寄付の開始を迅速に調整できたポイントとしては、「当初から仕組み化するのではなく、まずはスモールスタートで取り組む」ことがあげられます。仕組み化するとなると内部の調整に時間がかかりますし、反対意見も多くあがる可能性があります。まずは一度やってみて、徐々に賛同を受けて規模を拡大させるのが、近道ではないでしょうか。
- ・社員を農場に派遣し障がい者と作業を共にするノーマライゼーション研修も、本社業務とは直接関係のない研修内容であるため、企画当初は賛同が得られない懸念がありました。そこで、まずは時間の調整がつく役員に視察に来てもらい、農園やそこで働いている障がい者について紹介した上で、賛同を得ました。当初は全部署ではなく、6部署程度でスタートした研修でしたが、その後2年かけて現在の研修形態に至っています。